

第 1 部

基調講演

【講 師】一般社団法人国立大学協会

専務理事 山本 健慈 氏

【テーマ】「高校・大学・地域の連携で育てる未来の力」

高校生と大学生による地域活動体験発表

島根県立矢上高等学校

2年 埴口 未佳、中平真結花、榎本龍之介、南原 隼人

島根県立江津高等学校

2年 小川 凜子、土屋 那奈

島根大学生物資源科学部

2年 東村実菜子（COC人材育成コース）

〔進 行〕美濃地裕子（島根大学アドミッションセンター）

総合討論

【パネリスト】

山下 修 氏（江津市長）、

山本 健慈 氏（一般社団法人国立大学協会 専務理事）、

服部 泰直（島根大学長）

【コーディネーター】

泉 雄二郎（島根大学アドミッションセンター）

基調講演

高校・大学・地域の連携で育てる未来の力 ―若者へのメッセージ―

一般社団法人 国立大学協会
専務理事 山本 健慈

皆さま、こんにちは。国立大学協会の山本と申します。

先ほど服部学長からもお話ありましたけれども、この大学改革シンポジウムは国立大学協会の事業の一環として、全国の大学でやっていただいているものの一つでございます。そういう意味で、皆さんの封筒の中には、国立大学協会会長の山極壽一、京都大学総長の挨拶文を同封しておりますので、ぜひごらんいただきたいと思います。御存じのように、山極京都大学総長は、大変マスコミへの露出度が高い方なので、皆さんも御存じかもしれませんが、ゴリラの研究者でとても有名な方ございまして、アフリカで培ったゴリラと格闘した力でもって、国立大学を引っ張るというふうに言っておりますので、ぜひ関心を持っていただきたいと思います。

国立大学協会っていうのは、今、国立大学、86の連合体です。全国に、日本の大学、幾つぐらいあると思いますか、皆さん。公立大学、県立大学とか私立大学全部足したら幾つぐらいあると思う、800ぐらいあるんです。島根県は島根大学と島根県立大学だけですね、私立大学は今のところないですね。

というふうに、800ぐらいあるんですね。国立大学は86です。国立大学協会っていうのは、島根大学とか隣の鳥取大学とか山口大学とか広島大学とか、一番古いのは東京大学ですけども、そういう86の大学がありまして、一つの国立大学の制度という中で動いております。いろんな86

大学で共通する取り組み、今、大学入試の改革なども話題になっておりますけれども、そのこともどういうふうにやっていったらいいのかっていうことを議論して考えていく団体であります。

そういうことでありますけれども、御存じのように日本は大変、今、政治の話題にもなっておりますが、大学の授業料等学費が高い。国立大学でも53万5～6千円ですかね。初年度でいうと80万ぐらい払わなくちゃいけない。私立大学でいうと100万を超えるというので、世界の中では大変学費は高いし、まれに見る高等教育への条件の悪いところだと言われております。それを何とかしなきゃいけないということで、我々も努力しております。島根大学に接する方もまだまだ少ないと思いますけれども、きょうを機会に大いに島根大学や国立大学に親しみ、関心をもっていただければと思いますので、よろしく願いいたします。

さて、きょうはあと高校生と大学生の議論もあるということで、きょうのテーマに沿って、皆さん方、特に若い方々に私が伝えたいということを申し上げたいと思います。

自己紹介なんですけれども、私は、実は島根県のお隣の山口県で生まれました。昔、玖珂町といたんですけれども、岩国市になってるところに住んでおりました。昔、岩国から島根の日原まで岩日線というものをつくろうとう計画もあったのですよ。若い人は全然知りませんよね、鉄道を走らせろっていうのがありました。山口市にも住んでおりましたので、そこは津和野まで、山口線が益田まで走っておりますので、割と島根県とは縁がありました。父親は、養蚕、蚕の仕事をしておりましたので、そこには、この地域の、当時でいえば中学校を卒業して養蚕農家を継ごうという人が私の父親の働く蚕業試験場にたくさん来ておられて、その縁で私や、私の周りなども、最

近までこのあたり親しい方がおられましたので、割と来たところでございます。

最後は和歌山大学長をやって、今の職にあるんです。私の場合、大学だけではなくて、地域でもユニークなのは保育所づくりに30年ぐらい関係しております、その縁で、益田市には、2000年代には結構来て、益田にもたくさんの友人がおります。島根大学は、この間いろいろ縁がありまして来ておりますが、そんなことできょう来させていただきました。

さて皆さん方、きょうは、後から高校生が総合的な学習の時間で地域に接した経験とか、大学生の方はCOCの授業の一環で地域に出た研究をお話しになるということで、大変うれしく思っていますけれども、そもそも地域とは一体何だろうかということなんです。地域というのは、当たり前のことですけれども、いろんな人がいるところです。それから、山下市長もおっしゃいましたように、いろんな課題、問題、苦悩があるとことです。その一つの問題を考えてみても、それは見方とか考え方は、一様ではなくて、捉え方は多様にあり、対立や葛藤があります。これは地域の生の姿ですね。一つの問題をとってみても、それについて、これはいいことだと言う人もいれば、これはけしからんことだと言う人もいるぐらいに幅がある。それだけ人間というのは多様なものであるということです。

その多様な中で、私が学長のときに学生さんたちによく言ったのは、とにかく地域でいろんな人に会う。いろんな課題にぶつかるというのを見ながら、自分にとってどんな姿が自分の幸せであるかっていうことを考えてくれと。

きのうも島根に来る途上、岡山のある町に寄ってきました。それで小学校、中学校、高校の教育について、いろいろ議論していたんですけども、今、これはそこで出たのは、大変、大人も今窮屈な状況の中で暮

島根大学大学改革シンポジウム
2017年11月3日



高校・大学・地域の連携で育てる未来の力

・若者へのメッセージ

一般社団法人 国立大学協会専務理事
山本健慈

島根、島根大学とのご縁

1948年 山口県生 玖珂町(現岩国) 山口市
1977年 和歌山大学教員(教育学部) → 専門:社会教育学・生涯学習論
地域生涯学習計画・公民館

●1988年 無認可アトム共同保育所(大阪府熊取町)運営に関与→子育て支援システム論
→「ニュータウンまちづくり支援型保育園」の提案→社会福祉法人アトム共同福祉会アトム共同保育園設立(2003年)→2012年 同法人つばさ共同保育園開園
→非営利法人の経営

1998年 和歌山大学生生涯学習教育研究センター長・教授 → 大学と生涯学習
2009年8月 和歌山大学長(2015年3月退任)→大学経営
2015年5月 一般社団法人国立大学協会専務理事

★中央教育審議会生涯学習分科会臨時委員 2011年～ 第6期～第9期
2007年10月第11回学校と地域融合研第11回フォーラムin島根・益田
その後益田市教育委員会、保育園等と交流
2015年12月 大学評価・学位授与機構機関評価で島根大学訪問調査
2016年4月 島根大学地域育成人材入試
2016年10月 島根大学大学改革シンポジウム
<ともも未来を考える 地域でつながる私たちにできること>(雲南市)
2017年4月 島根大学ふるさと魅力化フロンティア養成コース

I

地域とは？

そこに出ることの意味

- ・多様な人々がいる
- ・多様な課題、問題、苦悩がある
- ・見方、考え方、価値の対立、葛藤の渦に身を置く

らして、あくせく暮らして、なかなか落ちついて自分のことを考えない、考える暇がない。けれども、若者は、今から50年、60年、70年生きていくわけです。ですから50年、60年、70年、どんなふうに生きるのが自分の幸せであるかっていうことをゆっくり考えてほしいというふうに思うんですね。

今20歳の方は、20年後で40歳で、30年後で50歳ですね。おそらくそれ以上皆さん長く生きられるわけで、そういうこれからの何十年後の自分の姿あるいは地域の姿、あるいは世界、30年後、40年後、自分は何をして、どういうふうに存在してるのが一番幸せなのかっていうことを考えてほしいというふうに思うんですね。

そのことを、私、学長時代、入学式で話しました。入学式で、自分の人生の幸せは何かっていうことを深く考えて、そして、自分で考えるだけでなく、それを友人たちと語り合ってくださいと。私としては、自分だけが幸せになるんじゃないくて、他者ととも幸せになるということを考えてもらいたいというようなことを言いました。それから、入学式って入学の学生は、ほとんど学長の話聞いてないようですね。気分が舞い上がっていて。しかし、幸いなことに、お父さんやお母さんがいっぱい来てるんですよ、今の入学式。それで、あるときから私は、これは学生に言ってもしょうがないと、来ている親御さんに言ったほうがいいなと思って、親向けのメッセージを入れるように変えることにしました。2013年の入学式では、こう言ったんですね。よく大学に入りましたねというのはもちろんなんですけれども、皆さんの大学の入学というのは、一定学力水準は達成してるので大学でも勉強できるだろうということで入学させただけであって、人間として一人前だっということを入れたわけじゃありませんと。これから自分が一人前の人間になる

II

地域での出会いのなかで、 自分にとってどんな姿が幸せかを考える

- 10年後(40歳)、20年後(50歳)、30年後(60歳)
- 自分、家族、地域、どんな世界
- そこで「私は何をするのが幸せか」

2011年入学式

第一は、まずは**自分の人生の幸福とはなにかについて、深く考えて頂きたい**と思います。自分を考える、そしてなにが幸福なのかを考える、これを**自分で考え、友人と語り合っ**て頂きたいと思います。そして自分の幸福が、他者の幸福と通ずる生き方を確立して頂きたいと思います。

2013年4月入学式

本日から相対する皆さんを、私たちは、「人間形成上の諸課題をかかえている」と認識しています。冒頭、私は、「皆さんの入学までの努力を讃え」と申しました。皆さんの本学入学は、学力水準の達成によって判定されましたが、それは、皆さんが入試科目で一定水準を得る為の努力されたことによるものです。しかし、これは**これからの人生の出発点に達したことに過ぎず、一人前の人間となるうえでは、まだまだ諸課題があるのです。人間として未熟な存在なのです。**

にはまだまだ課題があるので、未熟な存在であるということを踏まえてこれから取り組んでもらいたい。

学生だけが未熟だというのは、いけませんね。私は大学の学長としても教職員にもよく言っていたんですけれども、人間としての未熟さは教職員も一緒です。教職員も、学生の皆さんとともに人間となるための学習を積み重ねていくのが大学だと。教職員、学生が共同でそうしていくんだということを入学式で言いました。これが親御さんに言いたかった言葉なんですけれども、入学したってというのは、学力水準において、落ちた人よりもよかったということで合格したんです。しかし、問題は自分の気持ちや考えを他者に伝えることができるか。そもそも人間が他者のことを考えることができるか。自分ができることで他者を助け、自分ができないことは他者に助けを求められていることができるのかなど、何をもちて一人前であるとかという点で、自分の子供の存在、現在を見直してもらいたいと、親には、お伝えしたのです。

それはなぜかという、島根大学ではわかりませんが、和歌山大学の学長でいた時に経験したことは、私はさっき保育所を経営をしているって言ったんですけれども、保育所にトラブルのようなものが、全部大学でもあるのです。一番は、問題だなと思ったのは、学生生活を送るためにはいろんな手続きなどをやらなくちゃいけないですけども、みんな親がやってしまう。奨学金の手続きとか、授業料の免除とか。自分でやらないで、親にみんなやってもらってる学生が随分いたのです。だから私は入学式でさきのようなことを言ったのです。半年後ぐらいに、学生関係の事務をやっている若い職員に聞いたら、「学長が入学式で言ったのが影響があるかどうかわかりませんが、今年は親が、手続きなどであれこれと事務に言ってきません」と言ったので、やっぱり言うてみるもんだなと思ったもので

2013年続き

少し付け加えて言えば、人間としての未熟さは、皆さんだけでなく、私も含めて教職員も同様だと自戒、自覚しています。私たち教職員も、皆さんとともに「人間となるために学習」を積み重ねていく所存です。

ご家族の皆さんに申し上げます。皆さんのお子さんは、先に申し上げましたように、学力水準においては絶対的にも相対的にも、立派な水準に達しておられます。これは数量的に判断できることです。一方、人間としての形成の到達は、いかに認識しておられるでしょうか。

自分の気持ちや考えを他者に伝えることができるか、そもそも自分や他者のことを考えることができるか、自分ができることで他者を助け、自分ができないことは他者の助けを求めることができるかなど、何をもちて「人間になる」というのか、こうした視点でも、ぜひお子さんの現在を見直していただくことをお願いいたします。そしてお子さんの、これからの「人間となるための」学習と同様に、4年後には、彼女彼らが、人生の志に基づいて決定する自らの進路を受け入れてあげて、いただきたいと思っております。

9

2014年4月入学式

最後にご家族の皆さんに申し上げます。これまでの子育ての過程に心から敬意を表したいと思います。皆さんのお子さんは、学力水準においては和歌山大学入学にふさわしい水準に達しておられます。他方、人間としての形成の到達については、いかに認識しておられるでしょうか。一人前の、自立した大人としての成長の段階を、どう認識しておられるでしょうか。

お子さんたちは、学生生活のなかで、これから大小のトラブルに直面すると思っております。例えば、本日からすぐに様々な手続きが必要となりますが、最近心配いたしますことは、その手続きをご家族が代行したり、ご家族が質問や説明を求めたりするケースが少なくないことです。諸手続きを自ら行うこと、わからないことは自ら聞き様々な人に相談すること、これは、これからの人生にとって最も必要な訓練です。ご家族の皆様には、学生の自立への道を見守る姿勢で臨んで頂きたいと思っております。

10

Ⅲ

AIの時代、人間？

11

これまでの職業の多くをロボットがやってしまう

12

す。皆さん方、生きるっていうことは、生活の中での一人前というのは、いろいろな実務も含めてやることができるということです。そんなことを言ったんですけども、とにかく皆さん方、地域での出会いによっていろんな人に出会うことができ、いろんな課題に会うことができる。その中で、自分はその問題にどういうふうに関係していくことが、自分の幸せになるんだろうかということを考えてもらいたいというのが、皆さんに訴えたいことの一つです。

もう一つは、今、ロボット、AIの時代ということで話題になっています。皆さんのお手元にこういう冊子がありまして、とても美しい、新井紀子さんというロボット研究者で、数学者がそのインタビュー記事を掲載しております。ぜひこれを皆さんじっくり後から読んでもらいたいんですけども、この新井先生は、このインタビュー記事、大変気に入っていただいたようで、みずからツイッターで、「私の考えをうまくまとめたものが出ましたので、ぜひホームページにアクセスして見てください」と発信していただいたようで、ツイッターが出た瞬間から、国立大学協会のホームページにはアクセスがべらぼうにふえたということです。おかげで初めて、この地味な広報誌がを多くの人に認識してもらったということになります。ロボットの時代って非常に今言われているのは、今話題になっているのは将棋とか、藤井君はロボットと将棋をやって訓練したとか、それから囲碁の何々さんはロボットに負けたとか、そんな話になってますけれども、いろんな事務処理的な職業のほとんどはというか、今の職業の半分ぐらいは、近い将来ロボットがかわってやってくれるだろうという話になっています。新井先生は、「ロボットは、東京大学の入試を合格できるか」というプロジェクトでおやりになったんですね。このロボット君、残念ながら東京大学には合格できなかったんですけども、恐らく島根大



「ロボットは東大に入れるか」プロジェクトから見えてきたこと

13

人間しかできないことがある

「医者も教育者も研究者も、商品開発者も記者も編集者も、公務員もセールスマンも、耳を澄ます。耳を澄まして、じっと見る。そして、起こっていることの意味を考える。それ以外に、結局のところ、コンピュータに勝つ方法はないのです。」
(新井『仕事をコンピュータが奪う』2010年日本経済新聞出版)

14

IV

- 地域での出会い
- そして高校・大学での共同の学び
- ロボットを超える力
- 人間としての力を

15

- 耳を澄ます
- じっと見る
- 意味を考える
- 「総合的な学習の時間」「COC関係授業」など地域活動体験のなかで、この「コンピュータに勝つ方法」が身についたのでは？
- ワークショップの話し合いで確かめてください

16

学とか和歌山大学では合格できるっていう水準までは達したわけです。

ところが、新井先生はそれが言いたかったのは、ロボットが入試ができるかどうかということを実験したかったわけではなくて、詳しくは広報誌を読んでいただきたいんですけども、今、我々が入学試験で、できないと言っていることは、逆に言うとロボットでも達することのできることで、今の学校教育での学習とか教育ではやってないんじゃないか。むしろ人間としての創造性はその先にあるんだということと言いたかったんだと。これ、最後のほうにありますけれども、新井先生はこう言ってるんですね。ロボットの問題は、結局人間が何をできるかっていうことを突き詰めて言えば、考えさせる、考えなければならぬ。医者も教育者も研究者も、そして商品開発者も、記者、編集者、ジャーナリストも公務員もセールスマンも、ここです、耳を澄ます、耳を澄ましてじっと見る。そして、起こっていることの意味を考える。これはロボットにはできない。それ以外に、結局のところ、コンピューターに勝つ方法はない、「コンピューターが仕事を奪う」という中で言っておられますね。つまり、知識の量は最低限は必要ですけども、それをやたらと集積して何とかそれで勝負するっていうのは、もうロボットが圧倒的に強い。その問題をきちんと考えるということ、そして、その意味を考えるということは、人間しかできないんだということなんです。



さて、皆さん方が地域での出会い、そして、出会ったところでいろいろ発見した課題を高校や大学で学んでいくということの中で、ロボットを超える力、つまり人間しか持たない力っていうものは何かっていうことを探り当てて、つかみ取っていただきたいというふうに思うんですね。

私は、和歌山大学長時代にそのことを経験してもらいたくて、教育実習は僻地の学校にホームステイをさせてやるっていう制度をつくったり、それから、本当に山間、過疎の地に学生が出かけて行って、住民の人たちが葛藤してる姿に出会わせたり、外国でいえばタイのような、貧困もあれば国境もあって、他民族との関係でなかなか葛藤が激しい場所に学生を連れて行って、自分は世界で何ができるかっていうことを考えさせたりしました。そのとき学生が言ったことは、自分たちは受験勉強でそこそこ勉強がよくできると思っていたが、地域に出てみると、そんな勉強では全く役に立たないということを衝撃的に知ることができて、それで大学で何を学ぶかっていうことがはっきりしてきたということを次々と言いました。

ぜひ、今から皆さんお話しになる総合的な学習の時間で、どんなことを感じたのか。COCの関連事業で、自分が今まで見たことのなかった風景とか、感じるものがなかったこととか、どんなことを感じたのか。それをどのようにしっかり見詰めて、意味を考えたのか。その捉え方とか考え方は、100人いれば100人違うわけですので、何が正解であるとか、どういう捉え方が正しいっていうことではありませんので、ぜひ一人一人の見方、感じ方を出し合うことによって、お互いの認識の違いやということが大切なかっていうことを話し合っ、確かめていただきたいというふうに思っております。

時間になりましたので、終わります。ありがとうございました。

高校生と大学生による地域活動体験発表

健康づくり

～ケアごはんで邑南町の人を元気に～

島根県立矢上高等学校 2年

埜口 未佳、中平 真結花、
榎本 龍之介、南原 隼人

これから矢上高校の発表を始めます。矢上高校の行事の一つで、地域に向けて自分たちの意見を提言する未来フォーラムという催しがあります。そこで、私たちのグループは医療、福祉について、「総合的な学習の時間」を使って地域について調べています。そこで、医療、福祉の免許のない私たちにでもできることは何か、と考えました。最初に、邑南町の現状について知ることから始めました。

まず、邑南町に多い病気を調べてみました。社会福祉士さんに聞いたところ、死因に多いのはがん、肺がん、心臓病などがあり、病院に行く理由や入院の理由としては、心臓病、高血圧、糖尿病が多いです。また、邑南町は高齢者が多く、「低栄養」という問題があります。「低栄養」が引き起こす問題としては、たんぱく質不足と免疫力低下があります。それによって、寝たきりにつながっていきます。

低栄養の改善方法としては、主にきちんとした食事をとることが大切だとわかりました。では、きちんとした食事がどんなものなのか考えたときに、「ケアごはん」というものを見つけました。

「ケアごはん」とは、病気を予防するためのごはんです。入れる食材によって、自分で予防したい病気を予防することができます。また、「ケアごはん」そのものを毎日つくるのは大変だと思うので、日ごろの食事バランスを意識することから始めることも大切です。そこで、ぴったりの言葉があります。皆さんは、「まごわやさしい

健康づくり

～ケアごはんで邑南町の人を元気に～

島根県立矢上高等学校
普通科2年

邑南町の現状

死因：がん 肺がん 心臓病

通院または入院：心臓病 高血圧 糖尿病

邑南町の高齢者の現状



低栄養のケア・予防

- ・ 一日三食食べる
- ・ 楽しい食事にし、美味しく食べる
- ・ バランスよく食べる
- ・ 栄養補助食品の利用

健康長寿ネットより引用

ケアごはんとはなにか？

- ・ 病気予防のためのごはん
- ・ 日頃の食事バランスを意識するだけでも良い

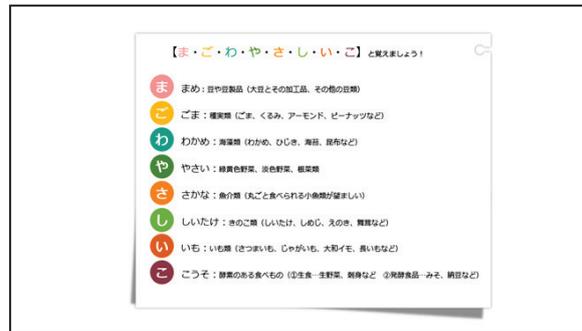


こ」という言葉を知っていますか。この「まごわやさしいこ」という言葉は、健康な食生活に役立つ和の食材の最初の文字を覚えやすく言いあらわしたものです。この中の食材を意識して料理に加えることで、いつものごはんが「ケアごはん」に変わります。

そこで、実際に学校で「ケアごはん」をつくってみることにしました。私たちは、高齢者の「低栄養」を改善するためには、どのような食材が必要なのかを考えました。先ほどお話ししたように、邑南町の高齢者の方はたんぱく質が不足しているため、たんぱく質が多くカロリーの低い豆腐を使用し、また、筋力を維持するために必要な動物性のたんぱく質の多い豚肉、鶏肉を使用しました。免疫低下を防ぐために、たくさんの野菜も使用しました。

自分たちが実際につくってみた料理は、「豆腐入りつくね」と「白菜と豚ひき肉の炒め煮」です。実際に先生方、保健師さん、社会福祉士さん、栄養士さんの意見を参考に作り、試食してもらったところ、「味が濃い」「炒め煮はアレンジがきく」「もう少し炒め煮にとろみをつける」などの意見をいただきました。この意見をもとに再び料理をつくりなおし、10月25日に邑智郡邑南町上田所で行われている運動教室で試食をしていただきました。10月25日、上田所の運動教室にお邪魔しました。17人の利用者さんに参加していただきました。「ケアご飯」とはどのようなものかを知ってもらい、実際につくり、試食してもらったところ、利用者さんたちからは、「炒め煮にとろみがあって食べやすい」「いろいろな料理に使いそう」と意見をいただきました。また、「もっと子供と触れ合う場を増やしてほしい」「実際に自分で気を遣って料理をつくっている」などの意見もいただきました。

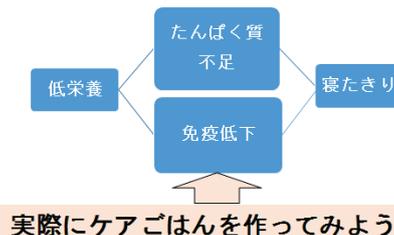
これらの活動を通して、二つ気づいたことがあります。



実際の活動1
・学校



邑南町の高齢者の現状



実際の活動1
・学校



「豆腐入りつくね」
「白菜と豚ひき肉の炒め煮」



「豆腐入りつくね」
「白菜と豚ひき肉の炒め煮」



一つ目は、「ケアごはん」は習慣化が必要ということがわかりました。このことから、目に見えるところにレシピや、「まごわやさしいこ」という言葉に気づくことができるかと習慣化されていくと考えました。

二つ目は、食事バランスの意識が必要ということです。日ごろ、自分で意識されておられる方もいましたが、より食事バランスを意識することで、高齢者にかかわらず、邑南町全体で健康な人が増えていくと感じました。

そこで、私たちはマグネットの配布、ケーブルテレビでの放送、矢高ニュースレターでのレシピの掲示を提案します。マグネット配布とは、先ほどから紹介している「まごわやさしいこ」を料理をするときによく目にする冷蔵庫などに張っておくことで、意識の向上につなげていくものです。ほかにも、ケーブルテレビ、矢高ニュースレターでレシピを紹介することで、たくさんの方に知っていただけたらと考えます。また、「ケアごはん」のレシピを応募してもらうことでさまざまな「ケアごはん」を紹介することができ、邑南町全体の意識の向上につながっていくと思います。

この活動を通して私たちが学んだことは、ただ単にバランスのよい食事をとるだけではないということです。実際に、上田所の運動教室のような活動に参加し、一緒につくって食べるということも大切だと感じました。また、「ケアごはん」は病気を予防する一つのツールであって、一緒に楽しむことで心のケアもできると感じました。

病気を予防する点に関連して、疫学という学問があると聞きました。最初に話したように、未来フォーラムに向け、予防学、疫学を詳しく調べていきたいと思っています。またアドバイスをいただけたらうれしいです。

これで矢上高校の発表を終わります。

実際の活動2

・上田所



行った活動を通して

・「ケアごはん」習慣化が必要



・食事バランスの意識



実際の提案

・マグネットの配布

・ケーブルテレビでの放送

・矢高ニュースレターでの掲示



まとめ



江津高校「KAWARAプロジェクト」について

島根県立江津高等学校 2年

小川 凜子、土屋 那奈

これから江津高校2年生の取り組みを発表します。発表者は江津高校2年、小川凜子と、土屋那奈です。よろしくお願いします。

江津高校では、「地域・社会を幸せにする」という、私たち自身の役割を意識するために、総合的な学習の時間を用いて、「KAWARAプロジェクト」に取り組んでいます。この名称は、江津が「瓦」の町であることから名付けられました。

地域の問題を意識するために、1年次には地域の方々を学校にお招きしてお話を伺い、地域課題について理解を深めました。2年生では、各自が設定したテーマで課題探究学習に取り組んでいます。2年生の学年目標は、「地域の課題を理解して、現在の自分との関わりを考える。」「地域社会における自己の役割を踏まえて、将来の進路設計を考え、それを自分の言葉で表現する」という2点です。今年度の主な取り組みは、この「課題探究学習」を柱としています。3学期には、各自が自分の成果として発表をする予定です。

今日は、2年生が中心となって夏休みに実施した地域活動についての活動報告と、今後、継続して取り組む内容について発表します。

江津高校では、生徒会を中心として、夏休みに小学生と関わる地域活動、「かわらっ子クラブⅠ」を実施しました。活動は、「学習活動」と「体験活動」の2種類で、小学生に案内をして希望者を募りました。「学習活動」は、自主勉強の支援や指導を行いました。小学生20名ほどに対して、毎回担当を決めて、4名ほどの高校生が指導に当たりました。これは学習活動の様子です。小学生とのやりとりや、勉強の指導

大学改革シンポジウム 江津高校2年生 代表発表

島根県立江津高等学校 2年

小川 凜子

土屋 那奈

平成29年11月3日(金)
パレットこまつ

江津高校 KAWARAプロジェクト について

・瓦(KAWARA)が多くのもを守ってきたように、生徒にも、江津の人々の幸せを守るために地域の課題に気づき、それを解決しようと自ら行動し、力を発揮してもらいたい。

・江津地域の人々の幸せを真剣に考えて、実践するために動き出してもらいたい。これが、「KAWARAプロジェクト」の趣旨である。

「KAWARAプロジェクトⅠ」 の取り組み

1年次には江津市役所のご協力のもとで、「江津市の総合戦略」と関わらせて、地域で活躍なさっている方々からお話をうかがい、「地域課題」について考えるきっかけをいただきました。また、地域で働くことの意義についても理解を深めることができました。

「KAWARAプロジェクトⅡ」 江津高校2年生が 「課題探究学習」で目指すもの

今年度の2年生の目標

- ・地域の課題を理解して、現在の自分との関わりを考える
- ・地域社会における自己の役割を踏まえて、将来の進路設計を考え、それを自分の言葉で表現する

方法に苦勞をしましたが、少しずつ上手に対応できるようになりました。「体験活動」は部活動単位で参加してもらいました。それぞれの部活動で活動内容を考えてもらい、毎回25名前後の小学生と一緒に楽しみました。これは「体験活動」の様子です。3年生女子の有志による参加もありました。それぞれの部活動の特徴を生かして楽しくできました。

この活動の後で、関わった生徒へのアンケートを次のような項目で実施しました。まず一つ目は、「どのような活動に参加しましたか？」という質問です。「学習活動」は11日間、「体験活動」は7日間の実施でした。どちらにも多くの生徒が参加をしています。両方に参加をした生徒もいます。次に、「活動に参加したきっかけや理由」を尋ねました。部活動での参加が多かったようです。そのほかの項目の中には、「先生に誘われた」など、みずからの意志でない意見も見られました。活動を通しての感想としては、楽しかったという一方で、疲れたという生徒も多いことがわかります。次に、活動時間や活動回数について尋ねてみました。まず、「時間」については90分間の活動時間を長く感じた生徒が何人かいたようです。「回数」についての回答もあわせて考えると、時間も回数も適当であるとする生徒が多いようです。続いて、「次回このような機会があればまた参加をしますか？」という質問です。多くの生徒が、また参加してみたいと考えています。「きっかけや理由」は、部活動や生徒会などで参加する生徒が多かったようですが、実際に体験をしたことでまた参加してみたいと考える生徒が多いことがわかりました。最後に、全体の感想や次回に向けての意見を尋ねました。「楽しかった」という意見が多い一方、「休憩後の勉強を集中させるようにするとよかった」など、次回に向けての具体的な意見も見られました。

今回のアンケート結果から、このような

2年生 これまでの活動と今後の活動

* 2年次での取り組み *

- 6月 課題探究のテーマ設定に向けて
島根県立大学生の探究課題を聴講
 - 8月 課題探究テーマ発表
 - 10月 アカデミックインターンシップ・インターンシップ
 - 12月 課題探究学習 中間発表会
 - 2月 課題探究学習 学年発表
 - 3月 課題探究学習 代表発表
- ※発表に向けては、各自が様々な活動を経験するよう心掛ける

地域活動「かわらっ子クラブⅠ」活動報告

○夏休みの取り組み

1. 学習活動
2. 体験活動

- 7月 学習活動 * 午後に学習活動
- 8月 学習活動・体験活動
* 午前に学習活動
* 午後に体験活動(部活動・有志)

かわらっ子クラブⅠ 1. 学習活動

- 7月 午後の時間に、高校生4名で小学生を指導
- 8月 午前中に高校生2~5名で小学生を指導

※小学生は各自の課題を持参して、自学自習の形での実施。高校生は必要に応じて関わる。

かわらっ子クラブⅠ 学習活動の様子



活動を継続することで、江津高校生の活躍の場が広がり、自分たちの成長にもつながると考えました。そこで、「かわらっ子クラブⅡ」という企画をスタートさせることにしました。まず、地域の「都野津町づくり協議会」の方からお話をうかがった上で、今後の活動を考えることにしました。お話をうかがう中で、地域のことで私たちが知らない話も聞かせていただきました。「あぶりこ」の由来もその一つでした。「昭和の初め、食料不足に備えて各家庭に杏（あんず）の木を植える取り組みが地域でなされました。その名残で、今でも庭先にあんずの木が残っている家があるそうです。都野津コミュニティセンターの名称も公募により「あぶりこ」と名付けられました。

それを踏まえて、具体的な活動内容を次のように考えました。「①冬休みを使った小学生との活動」、「②あんずを用いて地元の町をアピール!」、「③都野津町迷路の作成」の3企画です。

まず、一つ目の「冬休みを使った小学生との活動」では、前回は踏まえて、内容をよりよいものにするために、小学生にアンケートをとることにしました。日程や内容を調整して決めた上で、参加高校生を募る予定です。二つ目は「あんずを用いた地域活性化」です。広く高校生に知らせて参加者を募り、地域の人々からの情報も収集してアピール方法を考えたいと思っています。3つ目は「都野津町迷路の作成」です。この企画では、高校生だけでなく、小学生と一緒にアイデアを出して迷路を作成し、実際に迷路で遊ぶ際にも、参加してもらえようようにしたいと考えています。「都野津町づくり協議会」の方とのやりとりも含めて、私たちが企画をしています。現在、一緒に活動できる生徒を呼びかけているところです。この企画を成功させて、今後も、この江津高校生の活動として継続させていきたいと考えています。

これで江津高校の発表を終わります。ご

清聴ありがとうございました。



かわらっ子クラブ
2. 体験活動

- ・ 8月のみ実施。午後に生徒4～10名程度で小学生と一緒に活動

参加部 ・生活科学部 ・書道部 ・美術部
 ・野球部 ・女子バレー部
 ・男子ハンドボール部
 ・3年女子有志（読み聞かせ）

かわらっ子クラブⅠ 体験活動の様子



かわらっ子クラブⅠ 体験活動の様子



かわらっ子クラブⅠ 体験活動の様子



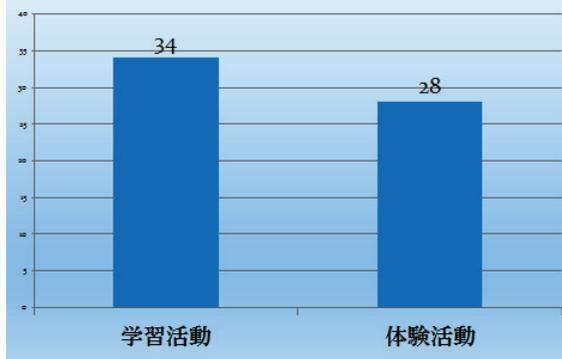
かわらっ子クラブⅠ 体験活動の様子



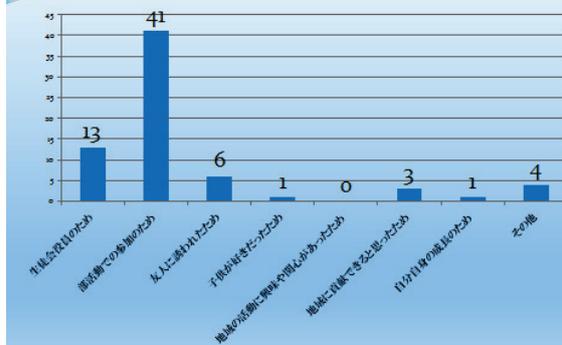
かわらっ子クラブ 参加生徒へのアンケート結果

学習活動と体験活動に関わった生徒へのアンケートを実施して、集計、分析しました。

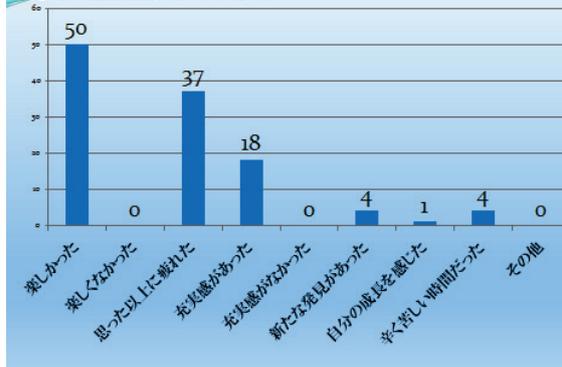
①どのような活動に参加しましたか？



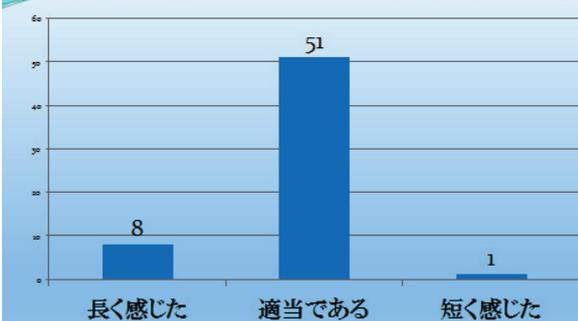
②活動に参加したきっかけや理由は何ですか？(複数回答可)



③実際に活動をしてみて、どのような感想を持ちましたか？(2つ回答) ④その理由を記入してください。



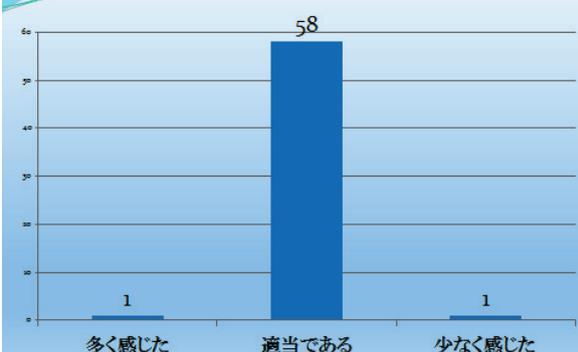
⑤活動時間(90分)についてはどのように感じましたか？



かわらっこクラブ今後の活動 「かわらっこクラブⅡ」

「都野津町づくり協議会」
と協力して、地域を活性化する
活動を企画しました。

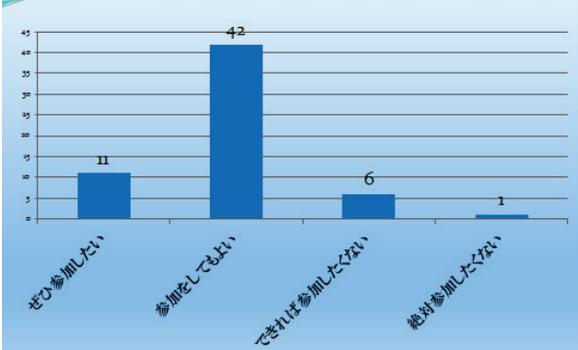
⑥活動回数についてはどのように感じましたか？



都野津町の「あぶりこ」の由来

- ・昭和の初め、食料不足に備えて、各家庭に「杏(あんず)」の木を植える取り組みが、地域でなされました。
- ・その名残で、今でも庭先にあんずの木が残っている家があるそうです。
- ・都野津コミュニティセンターの名称も公募により「あぶりこ」と名付けられました。
※「あぶりこ」はあんずの英訳「apricot」より

⑦次回、このような機会があれば、また参加をしますか？



具体的な活動内容

- ①冬休みを使った小学生との活動
- ②「あんず」を用いて都野津の町をアピール！！
- ③都野津町迷路の作成

⑧全体の感想や、次回に向けての意見を書いてください。

- 楽しかった・楽しく活動できてよかった。(11人)
- 来年も参加したい。・来年もやりましょう。
- 休憩後、勉強に集中させるようにする。
休憩時間のあとは、もう少し声をかければよかった。
- 小学生のためにもなり、自分のためにもなった。

①冬休みを使った小学生との活動

・夏休みの活動と同様に、「あぶりこ」を会場として勉強や遊びで触れ合う

1. 小学生にアンケート調査

- ・参加希望の有無
- ・前回の感想や次回への希望
- ・希望日時
- ・活動内容の希望

2. 「都野津町づくり協議会」との調整

3. 参加高校生の募集

②「あんず」を用いて都野津の町をアピール！！

1. 江津高校生に知らせる
・プリント配布やポスター
2. 参加高校生の募集
3. 地域に残っているあんずの木の持ち主に話をうかがう

③都野津町迷路の作成

・狭く入り組んだ路地が多い都野津の町並みを利用した迷路を作成する

1. 江津高校生に知らせる
・プリント配布やポスター
2. 参加高校生の募集
3. 小学生と一緒にアイデアを出して作成
4. 完成後、多くの人に参加してもらえる企画を考える

今後の活動に向けて

「都野津町づくり協議会」の方とのやりとりも含めて、私たちが企画をしています。現在、一緒に活動できる生徒を呼び掛けているところです。この企画を成功させて、今後も、江津高校生の活動として継続させたいと考えています。



大学生として地域活動を通して学んだこと

島根大学 生物資源科学部 地域環境科学科
2年 東村 実菜子

皆さん、こんにちは。今回は大学生として、地域活動を通して学んだことについて発表していきたいと思います。よろしくお願いします。（拍手）

まず、自己紹介をします。東村実菜子といいます。邑南町出身です。生物資源科学部の地域環境科学科の2年生です。私は学部所属と同時に、COC人材育成コースにも所属しています。これは、各学部で地域貢献人材育成入試を受けて入学した学生が学部を超えて集まっているコースです。1学年が大体50人くらいで、私はその1期生です。このコースは、将来、山陰地域に貢献、活躍したいという志を持っている学生を受け入れています。私は環境や生物に興味があり、それを通して地域に貢献したいという思いでこの入試を受けました。ですので、関心があることは環境アセスメントと地域づくりです。環境アセスメントとは、地域の環境を評価して今後の事業につなげていく活動のことです。地域づくりですが、私は地域の活性化のお手伝いに興味があります。

本日の内容ですが、私が経験した地域貢献活動について紹介します。そして、その活動で得られた課題、そこから今後に向けてのことをお話ししたいと思います。

まず、具体的な私が経験した地域貢献活動の事例を紹介します。これは私が1年生のとき参加していたもので、大学の授業や行事ではなく、友人に誘われて行っていたものです。その活動は社会人や学生が約15人くらい集まっているグループで行い、もともとは地域の有志が実施していた地域活性化イベントのお手伝いとして、地域の交流人口をふやす目的で活動をしていました。その地域は島根県の山間部に位置する

集落です。現在、このような場所は多いと思いますが、地域には数世帯しかなく、高齢化率100%のところでもともと地元の方が数年前から地域を活性化させるために行っていたイベントがありました。そのイベントというのは、地域にある資源を生かしてお祭りを行って、地域の外から人を呼び込んで交流人口の拡大を図ろうするものです。このようなイベントは、島根県に限らず、全国的に各地で行われています。

そのイベントに私のような大学生や社会人の人たち15名くらいが地域の外から関与して、お手伝いを始めたんです。イベント自体は今年の春行われました。秋から、準備を地域の人たちと一緒に行ってました。実際には、イベントを進めるための資金集めのクラウドファンディングやウェブでの方法、イベントで売るための商品開発や、もちろんイベント当日のお手伝いもしました。私は全般にかかわり、ミーティングにもほぼ毎回出席しました。そのおかげか、例年よりも来場者も増え、クラウドファンディングも決めていた金額も達成しましたので、一定の成果はあったように思います。ですが、成果を上げた一方で、私が感じた個人的課題があります。

私は活動を終えて、次のような個人的な感想を持ちました。つまり、私がこの活動に参加した最初は、とても地域のために良いことをしている、本当にそう思っていました。ですが、振り返ってみると、イベントをお手伝いしたことが本当に地域のためになったのだろうかという疑問に思いました。なぜかという、活動中にちょっと違和感があったからです。

このイベントをお手伝いするために、松江市内で週1回程度ミーティングを行ってました。そこには地域の人含まれていませんでした。ミーティングの場所で話合われていたことは、イベントに関することやその地域に関することはわずかで、個人的な地域に関する思いをメインに語り合

う場になっていました。地域であればどこでもよくて、もう自分がやりたいことを実現できればいいじゃんっていう雰囲気になっていました。そこに私はちょっと違和感を感じました。

さらに、イベント当日のお手伝いをしていて感じたことですが、私たちのお手伝いというのは、地域の一部の人には良いことだったかもしれないのですが、地域全体に貢献できるものだったのか。もしかしたら、他の人にとってはありがた迷惑だったのではないかという場面がありました。今振り返ってみると、この違和感の原因というのは、これは私自身のことですが、地域貢献しなきゃとか、地域活動をしなきゃという焦りがあって、若者やよそ者が交流することがその地域のためになるという思い込み、地域にとって本当に必要とされていることをよく考えておらず、地域貢献してる自分に満足していたのだと思います。今となつては、これは大きな反省です。

今回の地域活動で学んだことは、気持ちだけでは地域貢献はできないということ



す。今は、学生に対して、とりあえず地域に出てみなさいとか、地域で何かしなさいというプレッシャーをかけるような声が多くあります。一方で、私たちも何かしなきゃっていう焦りも出て、安易な気持ちで参加してしまうことがあります。ですが、地域が何を求めているのかわからないまま、言われるがまま地域に入ると、逆に地域を混乱させている、あるいは地域の負担になってしまう場合があるのではないのでしょうか。イベントの手伝いや盛り上げ役は、確かに重要な地域貢献だと思います。しかし、大学で学んでいる者として、どのような地域貢献ができるのかと考えた場合、私は大学で学んだことを生かした貢献がしたいというふうに思います。

地域を知るためには、地域に貢献できるような専門的な知識や技術というものが重要だと思います。私はこれまで、地域で何かしなさいということで地域を求めていたけども、実際に地域に入ったことで、地域を求めるのではなくて、何か困ったことがあったときに、その解決のために逆に地域から求められるような、専門的な知識や技術を持った人材にならないといけないのだと学びました。ですので、私はこれから大学生活を送る中で、生物資源科学部での環境アセスメントを初めとした地域環境に関する学びを深めて、将来的には環境分野での地域貢献ができればと思っています。さらに、COC人材育成コースでは、地域を知るための専門的な学びや地域課題解決のための方法など学んでいきたいと思っています。

以上で発表を終わります。ご清聴ありがとうございました。

総合討論

【パネリスト】

山下 修(江津市長)

山本 健慈(一般社団法人国立大学協会 専務理事)

服部 泰直(島根大学長)

【コーディネーター】

泉 雄二郎(島根大学アドミッションセンター)

○泉 大変お待たせいたしました。ここからは、3人のパネラーによる総合討論でございます。

コーディネーターを担当いたします島根大学の泉雄二郎と申します。よろしくお願いいたします。

それでは、改めまして、パネラーのお三方をご紹介します。

皆さま向かって左から、山下修、江津市長様でございます。

服部泰直、島根大学学長でございます。

山本健慈、国立大学協会専務理事様でございます。

よろしくお願いいたします。

討論のテーマは、地域の未来を創る力を育てるとしております。お時間は2時半を終了予定にしております。

それでは、まず、先ほど高校生2グループ、大学生1名が地域をテーマにした学習の様子を発表をいたしました。彼らの、彼女らの発表について、ご感想やらご助言やら励ましのメッセージ等をお聞かせいただければと思います。

山本先生からお願いできますでしょうか。

○山本氏 一番最後に回ってくると思ってました。

矢上高校、それから江津高校、島根大学の発表、お疲れさまでございました。

矢上高校の学生さん、「ケアごはん」の食事ということで地域の皆さんの健康の状態をしっかりと踏まえながら取り組まれたかをご発表されました。発表は、結果として、こんなことを気づきましたっていう発表でしたね。

しかし恐らく取り組みの過程では、いろいろその中で具体的に地域の人々と接触する中でお感じになったり、それから疑問に思ったり、ああ、そうだなと思ったりするようなことがたくさんあったのではないかと思います。後からワークショップでお話しされるらしいんですけれども、結果に至るプロセスをもっとしっかり、たくさんしゃべってもらおうと、恐らくその中にたくさんの経験が詰まってるんじゃないかなというふうにお聞きしました。

江津高校の学生さんのお話は、みずからによる地域課題の学習とともに、地域に接して、子供たち、小学生の方々との取り組みを発表していただいて、ああ、そうなんだ、高校生が小学生にコミットしていくってということもやられてるんだと思ったんですけれども、その中で、小学生たちのアンケートがありましたね。自分たちも少し前まで小学生だったわけなんですけども、ぜひ小学生たちが今何を考えていて、さっき大学生の話にあったんですけど、小学生は本当は何を求めているかっていうようなことを、恐らくつながりの中でお感じになってるんじゃないかと思うんですよね。ですから、自分たちが子供の時代の姿と、今お付き合いされた小学生の姿と重ね合わせて、今小学生が何を考えていて、何を求めているんだろうかっていうようなこともちょっと後の話の中で出してもらったらいいなというふうに思いました。

東村さんのお話は、自分が感じた違和感にこだわった、そして自分が何を助けるか、非常に貴重なお話だったと思います。私、新井



先生のところで耳を澄ますっていう話をしたんですけれども、今、地域に出るときに、地域の当事者が何を求めているのか、地域のことは地域の当事者が解決したいんだっていうことが最終の目的だと思うので、そのあたりで大事なことをこの短い時間におつかみになったんだなと思って、COCの活動は健在だというふうに思いました。ありがとうございました。

○泉 ありがとうございました。

続いて、山下市長、お願いいたします。

○山下市長 私の方も、今、矢上高校の皆さん、それから江津高校、島根大学の東村さんのお話を聞かせていただきました。

矢上高校の皆さんは、「ケアごはん」ですか。これを通じて、いろんな気づきがあったというふうに発表になっておられましたし、また、江津高校の皆さんは、地域での子供の成長を支えると、これをやられたというふうに伺っております。さらには、東村さんですね。これはもう実際に地域に入って、様々な活動をされたというふうに伺っています。

今、江津市を始めとする地方の多くは、少子高齢化の影響などによって、地域力そのものが低下し、いろんな問題が生じています。そうした中で、今回の活動で高校生、大学生の皆さんが地域に直接出かけて、地域についてしっかりと考えていただいたということは、私は大変素晴らしいことだというふうに思っておりますし、また、実際に地域づくりに取り組まれていること、大変嬉しく思っております。

その皆さんが行われた地域活動の効果についてですけれども、これは、活動された高校生や大学生の皆さんにとって、実際に地域活動を行うことで、学校教育の現場で培われた日ごろの学習が実際にどのように生かせるのか、体感できたのではないのかなと思います。場合によっては、全く生かされていないと思われるかもしれませんが、また、それぞれの地域の課題に触れられて、これからどんな学習を積み重ねて行ったらいいのか。私はそ

の方向付けになったのではないのかなというふうに思っております。

それから、先ほど東村さんが違和感という話をしておられましたけれども、地域の人たちにとっては、私はむしろ学生の皆さんから新しい視点をもたらされて、これまでやってきたやり方や考え方、果たしてこれでいいのかどうなのか。私は、考え直すきっかけにもなったのではないかなというふうに思ってますし、また、それを踏まえて、これからの地域活動の見直しにも繋がっていくのではないかなというふうに思っております。

今回の地域を教材とした教育活動っていうのは、高校生や大学生の皆さんにとって、学校教育であるとか家庭教育の中では得られない、生の体験ができるということ、また一方で、受け入れ側の地域の人々の新鮮な価値観をもたらされるといった、私は効果があるのではないかなと思ってまして、大変有意義だと思ってます。今後も、やはりしっかりと、学校教育現場だけでなく、地域の方へ出かけて行っていただけるといいかなと思いますし、また、そのことがひいては地域の活力に繋がって行きます。若い子達が入りますと、私も実際の現場を知ってます。地域の、特にお年寄りさん達が元気になりますので、今後もしっかりと地域に入って行っていただけたらと思います。

○泉 ありがとうございました。

服部学長、お願いいたします。

○服部学長 私、最後ということですが、まとめるということではなくて、私の個人としての意見を述べさせていただきたいと思いま



す。基本的には山本先生、それから山下市長のおっしゃったとおりだと思っております。高校生や大学生のお話を聞いた時のメモを見て思いますのは、3人の発表それから取り組みで共通してることは相手の立場になって考えると、こういうことにそれぞれ気がついたことが一番大きなことではないか思います。

最初の矢上高校の発表では、恐らく当初は、プランをつくったときには、健康で元気に高齢者の方に健康を保ってほしい、そのためには何かということで、料理という、ある意味、直接的な効果を狙った取り組みをされたと思います。でも、最後の言葉にあったのは、料理をつくってそれを提供することだけではだめだったんだよね。大切なのは、一緒につくって一緒に楽しむ、それが実は当事者の方にとってはすごく嬉しいことだったんですね。つくっていただいて提供してもらうことはもちろん嬉しいのであるけれども、実は高齢者の方はそういうことよりも、もしかしたら若い方と一緒に行動ができること、それが楽しかったのかもしれない。そういうことに気がついたこと。それこそが大切なことではないのかなと思います。

それから、江津高校の発表につきましては、小学生を対象なんですけども、ここも同じですね、先ほど先生方のおっしゃったように、小学生の気持ちになって人に指導するということは、その人の気持ち、その人の考え方とある程度同化することを試みないといけな。そのことに気がついたということが大きいと思います。

それから、島根大学の東村さんの発表で、非常に良いことを言ってくれたと思いました。COC人材育成コースの学生、しっかり育っていてくれていることを実感いたしました。それは何かというと、これも、地域から求められていることは何かということを経験の方の視点から考えたことだと思います。ある意味、親切の押し売りはだめだと。それから、市長さん言ってくださってるんですけども、若い方が地域でっていうことで、一緒にやっ

ていくことだけでも喜ぶんだと。よく私たち聞きます。そうすると、その言葉に甘えてしまって、いわゆる地域貢献をする自分に酔ってしまう。例えば大学であれば、そういう大学の取り組みにひよっとしたら我々は満足しておるのではないかと、そういうことにも気がつかせていただきました。これは、私どもとしてもしっかりこれから考え直さないといけないし、また、学生一人一人がしっかりと考え直して、真の地域貢献とは何かということを考えたいと思います。

それから、もう一つ、東村さんの言ってくれた大切なことは、いわゆる自分の専門性をしっかり身につけて、その上で地域貢献したい。だから、まず生物資源科学部の自分の今、勉強していることをしっかり学んで、それを今度はCOCの人材育成コースで地域を知ることにより、自分の知識を地域に活かしていくんだという発想、これは、島根大学が地域貢献を考えていくことの最も基本的な考えです。だから、このことを学生自らが理解して発言していただいたことを、非常に私は嬉しく思います。島根大学の学生については、その精神で自分の専門性をしっかり身につけて、それをもって地域で貢献する、役に立ち、自らもしっかりと元気はつらつと活躍できる、そういう学生を育てていきたいと考えています。以上です。

○泉 ありがとうございます。

会場の皆さまから、発表した高校生、大学生に何か励ましの言葉とか、ご助言等ございましたらお願いしたいんですが、どなたかございませんでしょうか。

それでは、また後半、最後のところでご意



見を求めようと思いますので、よろしく願いいたします。

次のテーマでございます。今、立派に育ちつつある高校生の、あるいは大学生の姿を我々は目の当たりにしたわけでございますけれども、今後、彼らの力を一層高めるためには、私たち学校、地域、大人はどんな取り組みや心構えを持ったらよいかについてご意見を伺おうと思います。

山下市長、お願いします。

○山下市長 それでは、島根大学さんへ、要望も含めて、お話ししたいと思います。江津市では平成19年度から地域コミュニティ事業の取り組みということで、今でも市内20地区で住民の自治組織が形成をされております。まだ緒についたばかりですので、全ていいとは申し上げませんが、いずれにしても全地域で立ち上げております。そして、市の方ではこの地域コミュニティ活動をきめ細やかに支援をしているところです。

今回のプロジェクトでは、学生さん達が地域課題研究という形で地域活動へ参画されていますが、実は、本市ではこれまでも地域活動に大学生が参加をされて、地域の活動が活発に展開された例がございます。それは、江の川下流域の松平地区なんですけれども、地域コミュニティ組織が発足するまでの2年間、実は島根大学の教育学部人文地理学研究室の作野先生が島根大学の皆さんと過疎・高齢化に負けない地域づくりを实践する住民グループ活動を支援していただいたという事例でございます。この活動に関わられた学生さんの中には、松平地区を研究するという事で、空き家問題を研究テーマにされた例もございます。また、この間、学生さん達は、そういった研究だけではなくて、地域の祭りであるとか、あるいは行事のときには積極的に参加されまして、学生さんが入っておられるときは本当に活気づいていたと私達も感じておりました。

また、今でも、当時その地区に通っておられた学生さんの中には、社会人になった今で

も農家の皆さんとの交流を続けていらっしゃる方がおられます。少子高齢化が加速的に進む江津市では、先ほど申し上げましたように、地域コミュニティ活動の活性化、これがまさに今、江津市の最重要課題です。この地域コミュニティ活動の活性化の鍵を握っているのは何かと申し上げますと、とにかくにも人材でございます。先ほどの発表でも少しありましたが、地域に発生する課題を的確に捉えて、そしてその課題の解決策を提示できるのは、私は、人材だと思います。

また、地域住民の合意形成を図るために、コミュニケーション力ですかね。こういったようなことも私は重要であると思っております。こうした力は、今まさにキャリア教育によって求められてる力ではないかなというふうに考えています。

その上で、今後の島根大学のあり方について、少し学長さんに要望を申し上げたいと思っておりますけれども、人口減少や少子高齢化の進行が顕著な島根県に立地する大学として、本県の様々な課題をきっちりと認識し、社会の中でどのような形で貢献することができるかということ、どうか学生さん達に意識付けをしていただきたいというふうに思っております。ご承知のように、本県は全国でもトップレベルの高齢化、そうした意味で、逆に考えますと、日本の地方の未来像ではないかなと思います。この島根県で解決できる課題は、日本社会に顕在化する様々な課題の解決にも、私は繋がるのではないかなというふうに思っています。どうか、そうしたことも踏まえて、島根大学においてはよろしくお願ひしたいと



思っております。

また、高校生の皆さん、大学生の皆さん、この島根県で生まれたことを、私は、逆手にとって、地域の現状、課題に向き合う機会を増やしていただく。そして、課題解決力を付けていただければ幸いかなというふうに思ってますし、また、そうすることによって、学生さんたちのキャリアアップにも私は繋がるというふうに思っていますので、そうした観点に立って、今後とも取り組んでいただけたらというふうに思います。

私の意見は以上でございます。

○泉 山下市長、ありがとうございます。

大学に対する具体的なご要望もありがとうございます。

これを受けまして、服部学長、お願いします。

○服部学長 どうもありがとうございます。

今、市長さんからいただきましたご意見は、非常に耳の痛いところでもありますし、大学としては十分意識して取り組んでいるつもりではございますけども、やはりまだまだそれが地域の皆様に伝わってない、また、取り組みが不十分だということを感じました。

島根大学におきましては、地域貢献をまず大きな柱、それをいかに人材育成、それから研究両面で支えていくかということが課題と考えています。特に、今、人口減、これはどこの地区も抱えてる大きな問題ではありますけども、人口減に対する一つの対策として、本学の卒業生を、できるだけ多く島根県内の企業等に就職していただいて、定住する、その取り組みを、今、行っております。先ほど山本専務理事からお話いただいたように、島根県には大学は二つしかございません。その島根大学と島根県立大学が力を合わせて高等教育を担い、地域に貢献できる人材をしっかり育てていきたいと考えております。

その上で、大切なのは、先ほど話をいたしましたけれども、やはり、地域が何を求めているのか、そのニーズの把握をもっとしっかりしないといけないということを感じしてい

ます。よく学生と企業とのマッチングという話もありますけども、地域との連携活動を行うときにも、お互いの持っているもの、それからお互いの求めているものを両者がしっかりと把握する、それが第一歩だと思っています。いわゆる大学側のひとりよがりによる地域貢献ではなくて、地域のニーズ、求めているものをしっかりと話しさせていただき、理解した上で、本学においてできる地域貢献、それから地域貢献のための人材育成に取り組んでいきたいと考えています。

それからもう1点は、島根県、非常に東西に長い県でありまして、島根大学は松江、出雲、いわゆる東部地区にあります。どうしても目が東部地区に向く傾向がありましたが、今後は、西部、石見地区にもしっかりと目を向けて、取り組んでいきたいと考えています。

実は、今回のシンポジウム、そのような意味合いもありまして、江津で開催させていただいております。島根大学がより石見地区の皆さんに身近な存在になるようにしっかりと取り組んでいきたいと考えていますので、またよろしく申し上げます。以上です。



○泉 ありがとうございます。

それでは、最後、まとめとして、山本先生から、地域の未来をつくる力を育てるために必要なこと、何が大学、高校、あるいは地域に必要なか。このあたりについてご助言をいただきたいと思います。

○山本氏 先ほどの冒頭のお話で、若者へのメッセージということでお話ししたんですけども、それは別に若者だけではなくて、大人、

市民としての大人、あるいは高校の先生もいらっしゃると思いますけれど、高校の教師としての大人、あるいは大学教員、大学関係者としての大人へのメッセージでもあと私は思っています。

つまり、ロボットを超えるっていうことで、耳を澄ますとか、じっと見るとか、意味を考えるということをやったんですけども、本当に山下市長おっしゃったように、課題がもう本当に満載であると。課題先進国とか課題先進地域なんていう言葉がありますけれども、恐らく世界がいろいろ直面する課題をみんな引き受けてるところがある。この課題を、本当に焦りに満ちた状況があるんですけども、それにちゃんと耳を傾ける、耳を澄ましてきちんと見る、意味を考えるっていうことが我々はできているかどうかということ、大人自身も考える必要があると思うんですね。いろんな焦りに満ちて、いろんなメニューとかぶら下げられますので、右往左往することなく、それをしっかり見るが必要じゃないかと思っています。

先ほど、私の大学時代の経験で、いろんな地域を研究してる先生たちが学生をフィールドに連れていったときに、学生たちは、自分たちの無知を恥じて、やはりしっかりした勉強をしなくちゃいけないというふうに、その先生たちの活動あるいは住民の方々の活動に巻き込まれるということによって思ったんですね。それは、本当に地域にコミットしている大学の先生たちが、まさに自分の専門的な知識をひけらかすというか、それで何か役に立つという以前に、その地域の人たちの本当に苦しんでいる、一生懸命取り組んでいることに対して、その先生自身が一人の市民として、同じ時代に生きる人間として、深くその苦悩を共有して、共感して、自分の人生をそこに役立てようという姿勢に学生が感銘したと思うんですね。やはり、自分がそういう一生懸命やってる先生たちの思いを見て、自分たちも何かやれることがあるんじゃないかと思ったと思うんです。

「総合的な学習の時間」での取り組みについて、高校の学生さんのお話を聞きました。そのときに、その裏側に、その高校で取り組んでいる先生方は、その背後で、どういうその地域に対する捉え方をしておられて、まさにその地域の人々の苦悩を学生さん以上に共有しておられて、どういうことが正確に課題だと思ってるか。あるいは、大学の教師も、単に自分の知恵が役に立つという専門性だけじゃなくて、どれだけ同じ時代に生きる者として、市民として共感、苦悩を共感してるかっていうことが本当は今問われているし、そうでなければ、まさにアリバイづくりという形をつくるだけになってしまうんじゃないかというふうに思いますので、ぜひ、学生さんだけではなくて、それをコミットする大人のほうもしっかりそういうことを考えていくことが必要なんじゃないかと思っています。以上です。

○泉 ありがとうございます。

苦悩を共有する、共感するという、大変重たいテーマを我々は投げかけられたんですけども、会場の皆さまから、何かご感想なりご提言なりご意見ございましたら、一つだけ、1点だけお聞きしようと思いますが、いかがでしょうか。

どうぞ。



○宮島氏 江津高校の校長の宮島と申します。

先ほどは、私どもの学校の生徒が発表させていただきました。この場をお借りしまして、感謝申し上げます。ありがとうございました。

世の中の最悪の不幸は、誰からも必要とされていないと感じること、というある人の言

葉がありますが、ひっくり返せば、誰かに必要とされている人生は最高に幸せだということになるかと思います。そのためには地域に出てみないとわからない、あるいは、行動してみないとわからないことがあると思うんですけど、高校生の総合的な学習や地域活動は、むしろ失敗のほうが多い。私はそれでいいと思っています。

実は、江津高校の教育目標には「地域社会を幸せにする人を育てる」というのがあります。これは何と司会をしていらっしゃる泉特任教授がかつての校長時代につくられたものです。私ども、それを引き継いでおりまして、高校生を地域に出して、活動させたいと思っています。どうか、今後とも島根大学の皆さん、地域の皆さん、江津高校生が地域に出て失敗するかもしれませんが、ご支援と温かい目で見守ってやっていただきたいと思います。ありがとうございました。

○泉 宮島先生、ありがとうございました。

そのほか、様々なご意見、ご提言等お持ちだと思います。お手元、アンケート用紙の感想欄をお使いいただきまして、皆さまからのご意見、頂戴したいと存じます。

それでは、時間を超過いたしました。以上で総合討論を終わらせていただきます。

パネラーの皆さまにいま一度拍手をお願いいたします。ありがとうございました。